

戦後教育実践の実像

— 越後妻有郷における地域教育運動の系譜 —

新潟経営大学 佐野 浩

1 はじめに

前報では、戦後の小中学校における「地域学習」が様々な事情や背景の中で、遂に従前の「郷土学習」と同等の意味を獲得したことを論じた。この過程で、我が国の教師達は、旧教育の経験を手掛かりに、子どもと郷土と自らの生活の現実に学び、体験を組織し、それを系統化する営みを通して、民主的主体となる手掛かりをつかんだと考えられる。

学校で営まれていた「地域学習」は、高度経済成長の進展とそれに伴う歪みの中で次第に住民達を巻き込み、運動化して行ったことが知られている。それは単に、子どもの行う地域学習を大人もするようになったということではない。戦後教育の理念が地域社会に深く根を下ろし、社会参加や協働・連帯の場やきっかけとしての「地域学習」を正しく位置付け、主体的な形成者たる市民・現実の生活者の創出に成功したのではないか、ということである。

これまで多くの論者が、戦後教育が理念の完徹性の面で弱さがあり、逆コースや経済成長による歪みを克服出来なかったことを指摘し、その原因として改革を行うべき主体の不在を挙げていた。しかし、言われるような地域における住民達の未成熟、戦後教育理念の受容の弱さ、改革の困難さの存在こそが、民主的な主体形成を呼び出したのではないだろうか。

ここでは、十日町を中心とする越後妻有郷の地域教育運動の事例を取り上げ、戦後教育の生きられた実像について検討する。

2 地域教育運動のはじまり

(1) 地域と教育との関わり

一般に、地表の広狭さまざまな部分を「地域」と呼ぶ¹⁾。それぞれの地域は、自然や人文に関する多くの事象の相互作用によって形成された個性である地域性を持っており、そこで暮らしている人間の集団に大きな影響を及ぼしている²⁾。今日、学校教育の場で「地域」と言えば、児童・生徒の生活している「身近な地域」のことであり、その学校の依拠する様々な施設や関係機関の所在する「学校区」を意味している。そして、本稿で取り上げるような「地域と教育との関わり」を論ずる場合の「地域」は、そこに暮らす人間の生活の共同

が生み出す社会である「地域社会」のことを指して使われている。

地域と教育との間には、切っても切れない自明の関係が存在する。地域という生活圏には、そこに住む人々を共同体の一員として育て上げ、文化を継承し、自らを存続・発展させていくための伝統的な教育機能が備わっている。明治以降の近代的な学校教育制度に於ても、学校は、特に義務教育諸学校は、地域の市町村によって設置が義務付けられ運営されて来た。学校以外のいわゆる社会教育も、主として住民の住む身近な地域を中心として営まれて来た。「地域」は、そこに住む人々が織りなす偽りのない生きられた「いとなみの根拠地」(大田 2017: 222)であり、「教育」は、それぞれの地域の有する基本的な諸機能を「人間化し、主体化するための目的意識的な手続き」(宮原 1976: 23)に他ならない。

そこで暮らす人々が民主的主体形成を成し遂げ、より良い地域生活者になるためには、それぞれの地域に即した教育の営みが必要であり、地域と教育が密接不可分の関係にあるのは明らかである。身近な地域には、それぞれの地域の環境が持つ教育力と地域の住民達の持つ教育力とが潜在し、そこには意図的であるか否かに関わらず、住民達の多様な生きられた教育と学びが存在していると考えられる。

「地域における教育」は、各地で日ごと繰り返される人々の自然な営みに過ぎない。人々が生活して行く上で必要な、この当たり前の「教育」という営みが、なぜ運動化しなければならなかったのだろうか。まず、「地域教育運動」とは何かから検討して行こう。

(2) 地域教育運動とは何か

学校教師や社会教育関係者の援助と父母住民の主体的な努力による子どもの発達を保障するための地域の多様な実践が、全国的に活発に展開されている。こうした運動は、高度経済成長とそれに伴う開発に起因する地域破壊が顕在化した1960年代後半に芽ばえ、70年代を通じて急速に発展してきた新しい住民運動であり、地域教育運動と総称されている。地域教育運動は、教育を国民の基本的な権利の問題として位置づけ、その民主的な発展と課題の解決を目指すもので、言わば、住民運動と教育運動の結節の環であり、教育権の民衆的な自覚の高まりを示す点で重要である(藤岡 1977: 137, 150)。

そもそも、児童・生徒の生きられた生活に立脚した自由で民主的な教育の樹立、すなわち教育における民主主義の実現は、戦後の学校と教職員、民間教育団体が齊しく求めて来た理想である。戦後復興期には、教育の地方分権、教育委員会やPTAの設置という新しい流れの中で、埼玉の川口プラン、広島の本郷プランといった教職員や住民達が協力して自ら地域教育計画を立案・実施する動きが各地で見られた。地域教育計画を立てると言うことは、「地域の民衆の自主的な協力と発意によって、民衆参加による新しいデモクラティックな学校を生み出していこう」という挑戦であり、「白紙から学校を民衆自身の手によってつくってみようという実験」であった(大田 1983: 34)。

それは、画一的な知識の注入に終始し地域から浮き上がった旧教育とは決別し、子どもの生きられた生活の中から民主的な主体形成を目指す新たな教育課程を生み出そうとする草の根の教育運動であった。しかし、自分達で話し合い、考え合い、打ち樹てた教育によって、自らの運命と自らの住む地域とを作り変えて行こうとするこの動きは、僅か数年のうちに潮が引くように勢いを失っていった。その後、地域で再び民主的な主体形成の機運が盛り上がるのは、1960年代後半を待たねばならなかったのである。

(3) 地域の教育と住民の出会い

本郷プランを主導した大田は、自らの実践を「民衆のほんとうの変革的なエネルギーの支えが不十分なもので」あり、「子どもの切実な悩みのとりくみから、地域との結びつきに発展しなかった」（大田 1952:215）として、「主体の成熟は決して十分なものではなかった」、「砂上の楼閣（大田 2017:19）」だったと評している。この大田の総括は、我が国の戦後新教育を評する代表的な言説である。

だが、終戦直後の日本人の関心が食糧、復員、天皇制とともに教育に集中したのは、紛れもない事実である³⁾。しかも、敗戦から間もない未曾有の混乱の中で、教育現場に於てCIE（民間情報教育局）や各地方軍政局の指導の下で次々に教育の民主化が進められた際に、これを熱狂的に支持したのは他ならぬ国民であった。戦後の新教育の推進は、占領軍の一方的な命令によるものではなかったのである。

アメリカのジャーナリストであるジョン・ガンサーは次のように述べている。

新教育法案が国会で討議されたさいには、一般の人々が、教育制度の改革に干渉してはならないとか、これを骨抜きにするようなことをしてはいけないとか、めいめいの考えをのべた手紙が、六百万通（ちょっと信じられないほどの数ですが、この数字に間違いはありません）も議員連のところへ舞い込んだことがありました。このほかに、総司令部にも二百万通ほど来ました。一般国民が、このようにはっきりと、しかもおおぜいで、自分たちの考えを述べるなどということは、戦前の日本ではとても考えられなかったところです。

…とにかく、種子がまかれたのです。果たしてどういうものになるかはわかりませんが、この種子から、何ものかが成長することは、間違いありません。（ガンサー 1951:358-359）

敗戦によるどん底の窮乏と混乱の中で、校舎も予算もなく、教師も教科書を印刷する紙やインクさえも満足に揃わないのに義務教育を延長し、昭和22年（1947年）4月から新制中学校を、翌昭和23年（1948年）4月から新制高校を発足しようと言うのである。新たに学校を作るため、全国各地の村々で住民達が労力奉仕を行い、寄付金を負担し、なけなしの村費を投じて学校づくりに邁進した事例は枚挙にいとまがない。

地域教育運動の最大の特徴は、「地域の再建と教育の再建をひとつのもの」として把握

し、実践化、運動化をはかる点にある（中内・藤岡 1979：310）。新教育に対する国民や地域住民の期待と支持は絶大であり、想像を絶するエネルギーを持っていたのは間違いのない。

主体は確かに居たのである。それが一時のエネルギー開放的な動きに終わり、教育による地域と民衆の真の解放につながらなかったのは何故だろうか。

地域の教育はどのように住民達と結び付いて運動化していったのか、その過程で、地域にとって教育は如何なる意味を持ったのか。次に、越後妻有郷の事例を見て行こう。

3 主婦達の生活記録運動

(1) 妻有のかあちゃん

前節に述べたように、敗戦後の我が国では、住民や親の教育運動は未成長であり、自らの教育権への自覚は薄く、単に「6・3・3・4制」や「新制中学校・新制高校」のような平等な教育制度や学校という施設を獲得するに止まっていた。この段階では、「教育」は専ら子どもや学校教育の問題であり、自らの実生活や地域の現実的な課題とは全く無縁の話であった。主婦達の生活記録運動は、こうした学校教育と地域の現実の生活をつなぐ営みとして、注目すべき実践である。

「生活記録」は、戦前から行われていた子どもの教育方法としての「生活綴方」を大人も書いてみることであり、子どもの活動とは区別して「生活記録」と呼ばれている。生活綴方運動は、戦前の教育現場から起こった教育運動だが、戦後になって、地域の大人達も生活綴方を書くようになったところに、教育運動と住民運動との接近が予感される。

十日町市を始めとする越後妻有郷は、生活記録運動の盛んな土地として知られており、最盛期の昭和30年代から昭和40年代に掛けて、地区ごとの婦人会などが中心となって50種類以上もの文集が発行されていた。「生活綴方」は、生活者である子どもが、自分で見たこと、聞いたこと、したこと、思ったこと、感じたこと、考えたことを、ありのままに書き付け、綴るものである。妻有の主婦達は、どのような地域の現実を生き、何を書いていたのだろうか。『妻有のかあちゃん』の事例を見てみよう。

「私の嫁いだころ」

たのしい思い出のはずの新婚時代も、私には、いま考えてもたのしかったことなどでてこない。終戦直後のあのどさくさまぎれ何をするのかさえ考える力もたない私は、親にいわれるまま嫁いでしまった。

食糧増産のさげばれていたあの当時、鍬やカマを持てるというだけで、百姓とは名ばかりの私、何を蒔くにもどういう肥料をどうやるのかさえしらず、ひとのすることを見よう見まねでどうにかいろいろのものを少しずつは収穫できるようになりました。

秋、どうにか取り入れもすみ、雪にうもれながら正月を迎えると東京からのお客、帰りにはやれ米だ、やれ餅だ、あれだ、これだと夏中汗水流して子どもを泣かせ、ひとさまに笑われながらも一粒でも多くと収穫したものを大半は分けてやらねばならなかったのだ。

心の中ではほんとうに情けなく、泣きたいくらい、でも顔ではおしげなく、来る年も来る年もそうしなければならなかったあの時代。

書くべきことではなかったけれど、嫁いだころの思い出として私の頭の中に一番先ひらめいたことは、つらかった、かなしかったあの時代でした。

（『妻有のかあちゃん』1965年、p.72.より抜粋）

「思い出……」

魚沼の山村へとついだ。「百姓はやらなくてもよい、やらせない」といわれて……それをまにうけた私はばかだった。

ある人が来た。その人はいった。「ここいらでは田は少なく、米だけに頼っては生きてはゆけない、とても雪は多いので、何をやってもだめだ。タバコはなじだらう。」と。夫は寝ても起きてもタバコが頭から離れなかったのだろう。三年もの間家を、家内の者を忘れたかの如く、東奔西走した。朝出たつきり行く先も告げず、夜も帰らぬ事もたびたびだった。

またたく間に金を使い込まれ、ばく大もない負債となった。子どもに「学級費を五十円ほしい」といわれて何も無い。「どうしても今日持って行くんだ」と泣かれて、私もともに泣いたこともあった。

五十円や百円の金を借せてもらったこともあった。実家へ帰るバスの中で切符を切ってもらおうとサイフを明けたら、はいっているはずの金がないのだ。バスを待たせて停留所ではじをしのんで金を借りた事もあった。借金取りや掛け取りはひんぱんに来た。県道を通るオートバイの音がどれもこれも私の家へ来るような気がしていつも胸をしめつけられる思いで、ノイローゼになったこともあった。ある時、来た人に私はいった。「掛けとりでしょうか」と、その人は笑った。「母ちゃん、きょうはほかの用事なんだ」と、私は笑えなかった。米が、たばこが穫れた、私は少しならばあるだろうと農協へ金下げに行った。

でも私は、はじかきにいったようなものだった。「下ろす金はない……まだこれだけたりない」といわれて余りのなさけなさに大声で泣きだしたかった。「かかがやりくりへただかららくなれないんだ。」と人に悪口をいわれた。実家へ行ってよく金をせびった。

世の中はほんとうにせちがらく、むずかしいということをしみじみ知らされた。あら波にほうり出された小舟がもまれてなかなか港にたどり着かず苦しみ抜いた船旅だった。でも向こうにほのぼのと燈台の灯りも見え始めてきた。早くろをこいで岸に近づこう。

（『妻有のかあちゃん』1965年、pp.22-24.より抜粋）

いずれも、戦争や敗戦、その後の高度経済成長に伴う産業構造の変化の中で翻弄される地域の暮らしの現実を、生活者の視点から書き留めている。「書くべきではなかったが」書かずにいられない自らの「大声で泣きだしたかった」生活を綴っているだけなのに、行間から、一人一人の身近な地域の日常生活が、国策や政策による農村の低位、家制度や封建的遺風の下に在る女の悲哀といった日本の社会全体に横たわる暗く大きな問題に真っ直ぐつながっていることが伝わってくる。だが、この二篇のような本気で自分の苦しみをさらけ出した生活記録は、他の文集でも滅多に見られないものである。妻有の主婦達が「ありのままに書く」のは容易なことではなかったのである。

この文集は、昭和40年(1965年)4月の発行で、「生活の歴史」という副題がついている。敗戦から二十年の節目に出された文集だからか、25才から75才までの主婦達の50篇余りの生活記録は、戦争体験やそれにまつわる生活の厳しさを綴ったものが多い。農家の嫁の苦勞を綴っているものも多いが、自分のことを、これだけ率直に書いているものは他には見当たらない。この文集は、書き手が特定されないよう、全て名前や部落名は伏せられ、文末にこれらの生活記録が書かれた昭和39年(1964年)時点での年齢のみが付されているが、この二篇には無い。勇気を振り絞って本当のことを綴ったが、誰が書いたか知られるのを恐れて年齢さえも出せなかったのだろう。

この文集の編集に当たった当時の公民館主事は、「(東京の先生方は)ほんののことを書くのに名前を書かないのはどうかってよく言われたんです。でも、ほんののことだから書けないんです。イニシャルだって書けないんです。それどころか、書きたくても(生活記録を)書けない人が大勢いたんです。」⁴⁾と話してくれた。これが戦後二十年近くを経た妻有の主婦達の置かれた偽らざる現実であったのである。

それだけに妻有の婦人達の学習意欲は高く、昭和38年(1963年)当時、津南町だけでも約90の学習グループが結成され、自主的に運営されていた。内容は雑多であり、系統的な学習集団とは言いがたい面も多いが、しかし、農村の家にあつて、その存在さえ認められなかった婦人が、家を越えて集まることによって、内容はとにかく視野を広くすることが出来たことは事実であった⁵⁾。「牛馬よりも休むひまがない」、「ねこよりも家の中では地位が低い」と言われた妻有の主婦達が鉛筆を持ち、声を上げ始めたことは、この後、次第に重要な意味を持って来るのである⁶⁾。

(2) 妻有の生活記録のはじまり

子どもらの生活綴方を指導する綴方教師たちは、生活の事実に基づいて思想を作り上げて行く一連の営みを「生活綴方のしごと」と呼んでいた。生活記録は「大人の綴方のしごと」である。子どもと違って、学校や教師という学び舎も指導者も持たない妻有の主婦達は、いつ、どこで、どういったきっかけで、どうやって生活記録を書き始めたのだろうか。「と

もしび」グループの A さんに話を聞いた⁷⁾。

私ら、娘時代は青年団とか 4H クラブとかで、スポーツ大会だ、弁論大会だ、改良作業着や料理の講習だとかで、あちこち出かけて歩いて、いろんなことしてたんですけど、嫁いだらこんだどっこも行かんなくなって。今の人達みたいに学校も行ってないし、これでは世の中についてかんなくなるって言ってたんです。美智子様のご成婚があって、皇太子様がお生まれになって、自分達も（子どもを持つ嫁として）何かしらんばと思ってたら、『家の光』に記事が出て⁸⁾。グループで悩み事を書いて、回して、生活改善しようっていうので、これだったら私にもできらんじやないかって。それで、こうやって（古い大学ノートの扉に書かれた名簿を見せながら）仲間を募ってノートに書いて、順番に回したんです。舅や姑に見つかると思われんだんだんがこっそり持ってくんです。

部落のことは男んしょがしらんだし、婦人会は姑が出らんだんが、嫁は家から出らんないんです。そしたら、公民館の先生が若妻会を作ってくれて、それでようやく（外に）出らんるうようになったんです。その頃は、みんなで農協や郵便局の保険とか積み立てとかを請け負って、毎月集めて回ってたんです。そうするとすこおし、一件あたり 50 円とかですけどもらえて、それを集めておいてお茶代やお菓子に充てて。そやって書いてるうちに、（公民館の先生が）文集にしてみないかって。

インタビューから分かるように、ともしび婦人学級の生活記録は、昭和 35 年（1960 年）に始まり、公民館の社会教育主事の指導で世に出たものである。回覧していたノートの初めのページに、「家の光 3 月号に 21 人の生活記録がでておりました 私達も何か作りたいと日頃話し合っておりましたのでこれを機会に書いてみようということに意見がまとまり、早速この手帳を用いて実行しました」とある。

後日、件の『家の光』の記事を持参したところ、A さんは、「苦しい生活と闘いながら、明るく生き抜く、岡山県児島郡灘崎町互助会の集団日誌」という副題の付いた紙面をよく覚えていた。寝息を立てる子どもの枕もとで互助会の帳簿をつける主婦の写真に自分達の姿を重ねて感激したことや、当時の村の暮らしや、嫁達の生活の様子を話してくれた。

農家の嫁は、とにかく家族の目や近所の人目があって、農作業に行く以外には外には出られなかったこと、財布も持たされていなくて、誰か集金の者が来ても「今、お義母さんが居ないから」と言って帰ってもらうのが普通であったこと、子どもに肌着一枚買ってやれなかったこと、日曜日というのは無くて、たまに村で決めた「農休日」があっても嫁は炊事や洗濯があって座っている暇など無かったことなど、盆暮れ正月も無く、本当に大変な毎日だったそうである。

そんな暮らしの中で、姑らに頼まれて嫁達が農協や郵便局の保険や貯金の集金を請け

負ったことで、「その集計」ということで、月に一度、役場の一室を借りて集まるようになったのである。それは、姑らから委譲された「村の公的な仕事」であり、農家の嫁達が家や世間の目から逃れて、ゆっくり足を伸ばし、お茶やお菓子を頂きながら、同じ境遇にある嫁同士で話せる唯一の機会であった。

『家の光』は、農協を通じて頒布されていた戦前から続く農村家庭向けの大衆雑誌である。この頃には発行部数が180万部に迫っており、農村の文化や啓蒙に一定の影響力を持っていたと考えられる。だが、Aさん達はそれほど確たる目的や書きたいこと、はっきりとした解決したい課題を持っていた訳では無かった。嫁同士で集まって掛け金の集計をする合間、茶飲み話をするうちに、気の合う仲間同士で「交換日記」を回すような気持ちで始めたのだと言う。これを「生活記録のしごと」にしたのは、公民館主事の力であった。

役場には件の「公民館の先生」(主事)も居ることから、様々な便宜を受けられたのである。この公民館の先生は、村の青年団の先輩であり、役場にはそうした知人・友人も多く働いていて、この後も何かと支援をもらうことになるのである。この頃の役場は、定時制高校に在籍する若手職員のための出張授業が開かれたり、青年団の本部も置かれたりと、ある種、村の文化センターのような様相を呈していた。思うように家から出られず、時代から取り残されていた農家の嫁達は、ここにささやかだが、再び学ぶ自由を得たのである。

(3) 小さな自由：話し合い学習の実際

生活記録を綴るのは、そこに書かれたことをみんなで話し合い、厳しい生活の現実の中から、新しいものの見方・考え方を育て、困難を乗り越えて行く強い心を持つのが目的である。仲間の力を借り、助け合い、書き合い、話し合っ、自らの思想を作り変え、日々の困難な状況を希望に変えて行くのである。人前では言いたくない辛いこと、悲しいこと、切ない思いを、勇気を出して「ありのままに書く」のはそのためであった。

話し合い活動は、行間に潜む真実を掘り起こし、問い掛け、揺さぶり、核心に迫って行く、生活者である書き手の認識を発展させる「生活記録のしごと」の重要な場面である。綴方教師たちが「概念くだき」・「概念づくり」と呼ぶ、人間として正しい認識と態度を形成する作業である。しかし、妻有の主婦達の「生活記録」は多くの文集が出されているが、こうした話し合い活動の経過を詳細に記録した資料は僅かしか残されていない。

そのうちの一つである『小さな自由』は、「話しあい」を主題に、昭和36年(1961年)11月に津南町で行われた社会教育・婦人教育研究集会の記録である。郡市内の各婦人学級のリーダー119名を集め、次に示したような、家の中で言いたいことも言えず、じっと堪えている主婦の切ない境遇を訴えた「小さな自由」という生活記録を題材にした話し合いの記録が掲載されている。

「小さな自由」

わがままがしたいわけではありません。ぜいたくがしたいとも思っていません。小さな自由がほしいのです。

ちょっと子どもの宿題を見ていると、お母さん（しゅうと）が「子どもと遊んでいてもいいのかい」という。また学校参観日などで外出して予定より遅く帰宅すると、「いつまで何していた」と夫はきげんが悪い。それで子どもの成績が悪かったり、いたずらが過ぎたりすると、「おまえのしつけが悪いから」、「宿題を見るのはお前の責任だ。」などと勝手なことをいう。何かと言えば、「いらぬことを言うな」と一言のもとにだまらねばならぬ自分の無力さに情けなくなる。

（小さな自由：3-4より抜粋）

この生活記録を書いた学級生をどうすれば救えるかについて、代表の10名の主婦達が話し合っ、次のような意見が交わされて行く。

私あの、やっぱりその家庭での話し合いが一番大切じゃないかと思うんです。何事も家庭の中で……、夕飯の時などに話し合ったりして、お姑さんやそういう方々とよく何でも話し合ってやるようにしたらもっと自由が出るんじゃないかと思います。

それには、自分の勇気が必要だと思うんです。自分の考えていることを姑さんがわかってくれるわけでもありませんし、ある程度自分で勇気を出してやらないことには、とてもダメだと思います。

お年寄りでも、ダンナさんがたでも、嫁や妻の言ったことはたしかにいいことだと思っても、すぐウンと言いたくないんですね。

あまり失望しないで、ゆとりをもって徐々に……。

救ってなんて言うの大へんおおげさになりますけども、お年寄りがなぜ子供と一緒に遊んでいてもいいのかい、というのか、お年寄りの心理を勉強すれば、またなぜおばあちゃんがこういうことをいったかということが、一歩研究できると思います。

はじめて婦人会の慰安旅行なんかに出していただく時、いく前はまあ「行ってこい、行ってこい」って進めてくれたんですけど、いよいよ今日は出発だという日になったら、非常にキゲンが悪いんですね。

年よりはさみしいんですね。

やっぱり出るときはさみしいんでしょうね。

やっぱりもう十年あまりいればみんなの気持ちをよくのみこんで要領よく立ちまわることが必要ですね。

自分の夫や姑の気持ちをつかむってということが大事なことです。それを運転して行くことが大切じゃないかと思います。(小さな自由：3-18より抜粋)

これに対して、参加した婦人学級生から、次のような意見が寄せられていた。

円満な家庭生活をいとなんでいられるらしいお話しぶりに近頃の農村婦人の向上がうかがわれ、心あたまる思いがいたしました。けれどあの方達は特別な方で、まだあの生活記録をかいた方より、もっともったやんでいる人があるわけです。そのような事を婦人学級の力で学級生の努力で解決していかなくてはならないでしょう。

それには自分自身をもっと勉強しなくてはならないと思いました。(小さな自由：31)

公開の場で行われたためか、「話し合いがきれいに出来すぎ、皆が一步しりぞいていた感があった」、「ごく悪い事は発表をさけて発言されていた」、「話の深まりが足りなかった」といった反省も出されていた。概念くだきが不十分と言うことである。

よそ行きでない普段の地域の集まりでは、主婦達は何を書いて持ち寄り、どう話し合っていたのだろうか。主婦達はそこから何を学んでいたのだろうか。

4 生活記録運動の成長

(1) 書かれていたこと

妻有の主婦達の生活記録運動について、本当のことをありのままに書くことの難しさ、本音を出し合い、話し合うことの難しさを見て来た。妻有の主婦達は、日頃、一体どんな話し合いをして、何を、どのように、どう変革し、成長して行ったのだろうか。

「ともしび」グループのAさんに相談したところ、近所に住む当時の仲間達を集め、回覧したノートやわら半紙に印刷して綴じた文集を見ながら、座談会を開いてくださった。こちらからお願いするまでもなく、話題は自ずと、豪雪と出稼ぎと機(ハタ)になった。

『ともしび』第1号には、この話題について次のような生活記録が掲載されていた。

「雪と出稼ぎ」三つ葉

出稼ぎより帰って来た主人に一番先に話した事は、今年の大雪でした。こんな大雪でも出稼ぎに頼らねばならぬ宿命を悲しく思った事はありませんでした。とても弱気ではつとまりません。私は主人が出稼ぎに出るようになってから女の優しさが失われて行くような気がしてなり

ません。どうしても強気になり、気持ち荒れるのではないかと思います。然し出稼ぎの収入の魅力は大きく私の家では丸八年もつづいております。せめて農協当りでよい内職でも見つけてくれたならと考えております。（ともしび 1968：20-21 より抜粋）

「はじめての出バタ」⁹⁾

主婦の内職というのはなかなか思うようにはかどらず収入もあまりありません。今年から思い切ってハタを始める事にしました。会社に行き練習バタを織り出したわけですが機械の動くのがとてもこわくてなかなか踏めません。一反切るのに一週間もかかってしまいました。あくる朝新しい玉が来て本玉だから落ち着いており上げる様にと社長に云われ、一反めはパスしたのだからと安心し、おり始めたのがまちがいのもとでした。なんとなしに気になり、織り上げたものを一つ一つおそろおそろたぐっていきました。すると一丈五尺くらいの所に花と葉がくいちがっているではありませんか。背中に水をかけられたように体から血の気が引くのが感じられたただ茫然と立ちすくんでしまいました。それは何時か社長が「この反物は三万もするんだぜ、気を付けてくれよ」と言われたものだから……。まよっていると先輩が来てこのままではキズバタになってしまうから、なんとかほどこす（ほどく）方法を考えようではないか、とほどこすことにしました。ようやく終わったのが四日目でした。はたという仕事を見ていればかんたんでおもしろそうだと思っていたが、実際にやってみれば思う様には出来ないものだとつくづく思い感じさせられました。（ともしび 1968：16-17 より抜粋）

確かに見たこと、感じたことを書いているが、ここから何が話し合われたのだろうか。

(2) 書かれていなかったこと

これらの生活記録のことに触れたところ、次のように沢山の話の花が咲いた。

農家の嫁は、財布を持たせてもらえない。子どもが生まれても、着せるものも買わなくて、願い祭り¹⁰⁾に実家に帰って小遣いをもらって買わなくて。

お盆になると盆踊りの太鼓の音がして、行きとうて行きとうて。けど（嫁に行けば）親戚のもんが来るし行かれねえんだ。秋になると稲刈りで、はぎに稲束をこう下から投げらんだが、初子がお腹にいらんだってのに休まんねえんだ。こう一束上げる度に吐いて、そうすると牛や馬は代えられるども、嫁は代えらんねえしうと言われて。

親がはなし決めて来て初めて会ったしょんとこに嫁に行って。あんぶ¹¹⁾なんてかんねんだが。（食べられない）こうやって（着物の中に手を入れて）隠して野良に行く時に捨てらんだ。けど、初子がお腹にいるってらんだに後から（ひもじゅうて）せつのうて、せつのうて。

あの頃は、女が家から出るのは（舅や姑の）目が光ってて、婦人会でもあれば出らんらんだが、（婦人会の集まりはずうっと）姑が出らんだし（自分達のような嫁は）出らんねんだ。

そって、ノートを書いて回したんだが。後で公民館の先生が回って来て、文集にしようって言うてくれて。いろいろ教えてくらんだが、（はっきり）名前を書けない人も大勢いらったんだ。

とにかく現金収入がのうて。副業に豚を飼わんだが、子豚が生まれると売って。お金はみんな舅に差し出すからいくら入ったか分からんのだて。で、あとで千円小遣いをもらわんだ。

男んしょは出稼ぎに行くが、冬になると（女が）道付けたり、雪のけせんばなんねえんだ。自分とこの家の屋根だけでのうて、学校の屋根も割り当てで行かんばならねえ。そって上がらんだどもおっかのうておっかのうて足がすくんで。いっぺん、屋根からアツて落っこちてのお。でも旦那が帰ってくると、お金はみんなお義父さん達にやらんだ。やっぱり空財布なんだ。

出機（でばた）が始まったのは昭和 37、8 年だったかね。みんなやったな。

あれでちいっとお金がもろえて、ほんに助かったあ。

あれでやっと息をついたんだんが。

出機は面白うてのお。こうやってくと、きれいな模様が出来て。面白かったあ。

出機は切なくて、農家の嫁から嫌われていたのかと思っていたが、現金収入の道が出来たことへの感謝の気持ちや、土間で出機に向かっている間だけは、舅や姑の目から逃れて一人になれたこと、無心に機を織っている間は悩みも忘れられたこと、隣近所の嫁同士でどれだけ織ったか競い合うのも誇らしく楽しかったこと、といった話が次々に口を突いて出て来た。苦しいこと、切ないことを笑い飛ばせる強さは、認識を改め、事実を対象化し、乗り越え、自らの行為や存在に意味を見出したことを示している。子どもを育てるには、親である自らも、人間として成長しなくてはならない。厳しい生活の中で、力の限り、真剣に雪や機と向き合ったそのこと自体が、彼女達の渾身の教育運動であったのである。

紙の上には書かれていないが、生活記録の行間やその奥に、ちゃんと本音が書かれていたのである。彼女達は、自らと自らの思想を確かに作り変えていたのである。

5 結びにかえて

ともしびグループは、その後も生活記録を通して自分達の生活を見つめ、話し合い、改善の道筋を探し続けた。そして、とうとう昭和 45 年（1970 年）に、東京で働く同郷者を頼りに、ハリマヤ運動用品(株)の工場誘致に成功する。雪深い豪雪の過疎の村に、正社員

50人、パート10人、内職20人の雇用の場を作り、一致協力し、この工場を同社では最高の生産高を誇るトップ工場に押し上げたのである。運動着の縫製作業を行う女性社員達のために保育園も併設され、彼女らの暮らし向きは一変したのである¹²⁾。この工場は川西町に進出した事業所第一号であり、毎月決まった収入をもたらずハリマヤの出現は、農家の主婦の地位を大きく変えるきっかけになったと言う。

苦しい毎日の中で、主婦達が自らを組織し、書き留め、話し合い、声を上げ、行動し、解決すべき課題の背後に潜む暗く大きな問題についての学習を深め、成長して行く経過を見て来た。これは、地域社会の担い手としての自覚を持った主婦達の間人解放を目指す自己教育運動である。妻有の主婦達の生活記録運動は、地域教育運動へと離陸し、地域の再建と住民の民主的な主体形成に大きな役割を果たしたと言える。

しかし、全国的な過疎化と少子高齢化の波はこの地にも押し寄せており、妻有は今もゆきづまっている。この土地で、現代美術を通じた地域再生に取り組んでいる北川は言う。

最初の妻有入り以来、私は自分で車を運転し、この地域を廻りました。そこで驚くのは、道が途中で切れていたり、その奥がないことの多さでした。…つまり道がとつぜんなくなるのです。まさにどんづまりなのです。…ここから先がない時に人はどうするのでしょうか。すべてを受け入れて生きるか、排他的になるかどちらかでしょう。（北川 2015：43-45）

日々の生活の現実を受け止め、認識と思想を作り変え、態度を作り、力を合わせて、困難を乗り越えて行く民主的主体を作ることこそが、戦後教育の目的であった。しかし、地域を取り巻く厳しい状況は、形を変えて、今なお続いている。ポストモダンの時代を迎えた今日も、地域と地域住民の教育はさらなる成長と飛躍を求められ続けているのである。

我々が直面している地域教育運動の現代的課題とその取り組みについては、稿を改めて論じたい。

参考文献

- 大田 堯, 1952, 「地域の教育計画」, 宗像誠也編, 『岩波講座 教育』第4巻, pp.181-222., 岩波書店.
大田 堯, 1983, 『教育とは何かを問いつづけて』, 岩波書店.
大田 堯, 2017, 『地域の中で教育を問う〈新版〉』, 藤原書店.
ガンサー著, 木下秀夫・安保長春訳, 1951, 『マッカーサーの謎』時事通信社.
北川フラム, 2015, 『ひらく美術』, ちくま書房.
中魚沼郡十日町市社会教育振興会婦人教育研究グループ, 『小さな自由』, 1962.
中魚沼郡十日町市婦人教育研究グループ, 『妻有のかあちゃん』第二集, 1965.

中内敏夫・藤岡貞, 1979, 「発達を保障する教育運動と教育計画化」, 岩波講座『子どもの発達と教育 7』岩波書店, pp.279-324.

中仙田ともしび婦人学級, 1968, 『ともしび』第1号.

藤岡貞彦, 1977, 『教育の計画化』, 総合労働研究所.

宮原誠一, 1976, 『宮原誠一教育論集 第一巻』国土社.

注

- 1) 日本地誌研究所編『地理学辞典』二宮書店, 1973. p.452.
- 2) 前掲『地理学辞典』p.458.
- 3) 週刊新潮編集部『マッカーサーの日本(下)』新潮社, 1983., p.82.
- 4) 『妻有のかあちゃん』の編集グループ、「中魚沼郡十日町市婦人教育研究グループ」に所属していた公民館主事の一人からの聞き取りから。他の文集を手掛けていた別な公民館主事も、主婦達の同様な「書くに書けない」境遇を話していた。
- 5) 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会『津南町における婦人学級の現状』, 1963., p.5.
- 6) 津南町公民館『学習グループを育てるために』, 1963., p.2.
- 7) ともしびグループのAさんには、平成26年(2014年)の9月から平成28年(2016年)10月に掛けて何度もお話を伺った。当時、回覧したノートの実物や当時の写真、後年に務めた婦人会の綴りなど、貴重な資料も見せていただいた。
- 8) 『家の光』昭和35年(1960年)3月号「二十一人の生活記録 一 苦しい生活と闘いながら、明るく生き抜く、岡山県小島軍の灘崎町互助会の集団日誌一」(pp.65-71.)である。
- 9) 機屋(はたや)が農家や一般家庭などに織機を貸し出し、副業として織物を織らせること。
- 10) この頃の農村では、月に一度の農休日以外は、青年団が重立衆に願い出て不定期に休みをもらう習慣になっていた。農家の嫁は、この日ばかりは里に帰ってゆっくりすることができたが、夕方になると帰りたくなくて切なかったものだという。
- 11) 屑米を粉に引いて作ったお焼きのような食べ物。大根菜やあずきが入っている。農家の日常食。
- 12) 川西町役場発行『広報かわにし』第141号(昭和45年5月10日号)1面や、ともしびグループへの聞き取りから。『広報かわにし』第159号(昭和46年11月10日号)1面には、ハリマヤ橋工場新設の記事もある。橋の婦人グループに話を伺ったところ、こちらも「遅れた地域が一変した」とのことであった。